

# 蜜柑

PDF No Text サンプル

## 芥川龍之介

ある或曇った冬の日暮である。私<sup>わたくし</sup>は横須賀<sup>よこすか</sup>発上り二等客車の隅<sup>すみ</sup>に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外<sup>のぞ</sup>を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯<sup>ただ</sup>、檻<sup>おり</sup>に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労<sup>けんたい</sup>と倦怠<sup>けんたい</sup>とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套<sup>がいとう</sup>のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元気さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛<sup>くつろ</sup>ぎを感じながら、後<sup>うしろ</sup>の窓枠<sup>まどわく</sup>へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄<sup>ひよりげた</sup>の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云い<sup>ののし</sup>罵<sup>ののし</sup>る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌<sup>あわただ</sup>しく中へは行って来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐<sup>おもむろ</sup>に汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットフォームの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙<sup>ばいえん</sup>の中に、未練<sup>うしろ</sup>がましく後<sup>うしろ</sup>へ倒れて行った。私は漸<sup>ようや</sup>くほっとした心もちになって、巻煙草<sup>まきたばこ</sup>に火をつけながら、始めて<sup>ものう</sup>懶

い 睨<sup>まぶた</sup> をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥<sup>べつ</sup>した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返<sup>いちようがえ</sup>しに結って、横なでの痕<sup>あと</sup>のある鞆<sup>ひび</sup>だらけの両頬<sup>ほお</sup>を気持の悪い程赤く火照<sup>ほて</sup>らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。しかも垢<sup>あか</sup>じみた萌黄色<sup>もえぎいろ</sup>の毛糸<sup>えりまき</sup>の襟巻<sup>ひざ</sup>がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁<sup>わきま</sup>えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わって、刷<sup>すり</sup>の悪い何欄かの活字が意外な位<sup>あざやか</sup>鮮<sup>あざやか</sup>に私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道<sup>トンネル</sup>の最初のそれへはいったのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱<sup>ゆううつ</sup>を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、流職<sup>とくしよく</sup>事件、死亡広告——私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠<sup>さくぼく</sup>とした記事から記事へ殆<sup>ほとんど</sup>機械的に眼を通した。が、その間も勿論<sup>もちろん</sup>あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたようなおもも面<sup>おもも</sup>持ちで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そして又この平凡な記事に埋<sup>うずま</sup>っている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛<sup>ほう</sup>り出すと、又窓枠に頭

を<sup>もた</sup>寄せながら、死んだように眼をつぶって、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに<sup>おびやか</sup>脅されたような心もちがして、思  
わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、  
<sup>しきり</sup>頻に窓を開けようとしている。が、重い<sup>ガラス</sup>硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あ  
の<sup>ひび</sup>鞆だらけの頬は<sup>いよいよ</sup>愈赤くなって、時々<sup>はな</sup>鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる  
声と一しよに、せわしく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を<sup>ひ</sup>惹  
くに足るものには相違なかった。しかし汽車が<sup>まさ</sup>今將に隧道の口へさしかかろうとしてい  
る事は、暮色の中に枯草ばかり<sup>あかる</sup>明い両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たので  
も、すぐに<sup>がてん</sup>合点の行く事であった。にも<sup>かかわ</sup>関らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の  
戸を下そうとする、——その理由が私には<sup>の</sup>呑みこめなかった。いや、それが私には、  
単にこの小娘の気まぐれだとしか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として  
険しい感情を<sup>たくわ</sup>蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を<sup>もた</sup>擡げようとして悪戦苦闘する  
<sup>ようす</sup>容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で<sup>なが</sup>眺めていた。す  
ると間もなく<sup>すさま</sup>凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の  
開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、  
<sup>すす</sup>煤を<sup>とか</sup>溶したようなすす黒い空気が、<sup>にわか</sup>俄に息苦しい煙になって、<sup>もうもう</sup>濛々と車内へ<sup>みなぎ</sup>漲り  
出した。元来<sup>のど</sup>咽喉を害していた私は、<sup>ハンケチ</sup>手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に  
浴びせられたおかげで、<sup>ほとんど</sup>殆息もつけない程<sup>せ</sup>咳きこまなければならなかった。が、小  
娘は私に<sup>とんじゃく</sup>頓着する<sup>けしき</sup>気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返し

の鬢びんの毛そよを戦がせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなって、そこから土においの匂や枯草の匂ひややや水の匂ひややが冷かに流れこんで来なかったなら、漸ようやく咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道すべを迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟はさまれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁わら屋根やねや瓦かわら屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一いちりゆう旒のうすのうす白い旗ものうが懶ゆるげに暮色ゆすを揺っていた。やっと隧道を出たと思う——その時その蕭索しょうさくとした踏切りの柵さくの向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃そろって背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙あげるが早いか、いたいけな喉のどを高く反そらせて、何とも意味の分らない喊かんせい声を一生懸命にほとばし進しんらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いきおいよく左右に振ったと思うと、忽たちまち心おどを躍らすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑およが凡そ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑のんだ。そうして刹那せつなに一切いっさいを了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴おもむこうとしている小娘は、その懐ふところに蔵していた

いくか  
幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に<sup>らんらく</sup>乱落する<sup>あざやか</sup>鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、<sup>またた</sup>瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない<sup>ほがらか</sup>朗な心もちが<sup>わ</sup>湧き上って来るのを意識した。私は<sup>こうぜん</sup>昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、<sup>あいかわらずひび</sup>相不変鞆だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを<sup>かか</sup>抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。

.....

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を<sup>わずか</sup>僅に忘れる事が出来たのである。

※ このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/)(<http://www.aozora.gr.jp/>)で公開されている作品を元に作成しました。